

超域研究機構第1期プロジェクト 研究成果（中間）報告書— 概要 —

1. 研究プロジェクト名

「大域的文化システムの再構成に関する資料学的研究」

2. 研究プロジェクト構成員職・氏名

| | |
|---------------------------------|-------|
| 代表者：人文社会・教育科学系（人文学部）教授 | 關尾 史郎 |
| 分担者：人文社会・教育科学系（人文学部）教授 | 荻 美津夫 |
| 分担者：人文社会・教育科学系（人文学部）教授 | 矢田 俊文 |
| 分担者：人文社会・教育科学系（人文学部）助教授 | 原 直史 |
| 分担者：人文社会・教育科学系（人文学部）助教授 | 白石 典之 |
| 分担者：人文社会・教育科学系（人文学部）助教授 | 山内 民博 |
| 分担者：人文社会・教育科学系（人文学部）助教授 | 高橋 秀樹 |
| *分担者：人文社会・教育科学系（大学院現代社会文化研究科）教授 | 鈴木 佳秀 |
| *分担者：人文社会・教育科学系（大学院実務法学研究科）教授 | 葛西 康德 |
| *分担者：人文社会・教育科学系（人文学部）教授 | 山内 志朗 |
| *分担者：人文社会・教育科学系（大学院実務法学研究科）助教授 | 松本 英実 |

*は、平成15～平成16年度のみ。

3. 研究成果の概要（概要）

(1) プロジェクトにおいて目標としたもの

発足当初、近代以前のアジアとヨーロッパを含めたユーラシアという「大域」を設定し、そこにおける文化交流とそれを支えた人とモノの移動、それらを保障した諸制度の解明を第一の目標とした。その際、解明のための分析対象として一次史料（非文字資料や考古遺物を含む。以下、同じ）を重視し、その発見と解釈を尊重することを掲げた。これが第二の目標でもある。いずれも21世紀の学問課題として、時宜を得たものと言いうことができるものである。

第一の目標については、従来の歴史学が特定の「地域」を重視し、「地域」間の交流・関係を軽視してきたことへの反省を踏まえており、かつまた近年の「世界システム論」がヨーロッパ中心史観から脱却しきれていないことへの批判的な視座をも有している。また第二の目標については、19世紀以来の二次史料（編纂史料）に立脚した古典的な政治史研究からの自立、新たな資料学の確立を含意していた。

(2) 目標に到達するために選択した方法・手段

(1)に記した第二の目標こそ、第一の目標に到達するために最も自覚的に選択した方法であり手段だが、そのための重要な史料群の整理を目ざし、研究資料叢刊として、資料群の集成・データベース化、資料群の目録、さらには読解のための工具書などを公刊することを計画、実行してきた。一部については代表者のホームページでも公開した。
<http://h0402.human.niigata-u.ac.jp/>（本プロジェクトのそれは、以下のとおり。
<http://h0402.human.niigata-u.ac.jp/taiiki/>）

(3) これまでの研究で得られた成果

(2)に記した研究資料叢刊のほかに、プロジェクトの機関誌として『資料学研究』を刊行

し、成果は個別論文の形でこの誌面上に公表してきた。また学内外での口頭発表についても言うまでもない。

内容的には、発足当初の分担者のうち、ヨーロッパ、オリエント・西アジアをフィールドとする4名が平成16年度までで新しいプロジェクトに移籍したため、最終年度はよりアジア（ユーラシア東半部）、とくに東アジアの周縁世界に特化した内容に変更せざるをえなかった。したがって成果はなお十全とは言いがたい。しかし以下の点で評価に値する成果を上げることができた。

第一に、東アジア周縁世界における文化伝播（中国西北辺境における西方系の埋葬習俗、ペルシア系音楽文化の古代日本への伝播、モンゴルにおけるイスラム系建築など）の実態解明、第二には、諸資料の調査・紹介、目録作成を、大域プロジェクト研究資料叢刊の刊行という形で実現したこと、そして第三に、中越地震で被災した文化財の救出を支援し、資料（主として古文書類）の保存を推進しながら、存在と内容の紹介につとめたことなどである。

(4) 更新する期間で目標とする事項及びその研究計画

期間の更新に際しては、日本をはじめとする東アジアをフィールドとする考古学、日本をフィールドとする歴史地理学のスタッフを2名新規に分担者に加え、より東アジアに特化する方向を目指した。超域研究機構に所属（兼務）するスタッフは、これで9名だが、これ以外にも研究協力者に関係する専任教員を加え、主要なフィールドを東アジア周縁世界と設定する。日本列島や環日本海地域もここに包含されるが、朝鮮半島、北東アジア、北アジア、および中央アジアなども念頭に置いたフィールドである。この地域は、中国の巨大な文明から多くの影響を受けて文明化されたと一般的には考えられているが、必ずしもそのような一元論で説明しうるものではなく、実際には周縁世界が中国に影響を与えた場合や、周縁世界間での文化接触・交流の活発化といったような現象も見られるのである。また周縁世界こそがユーラシア全域に開かれていた、つまりヨーロッパや西アジアとダイレクトに関係をもっていたという解釈も可能である。このような観点は、当初計画した、「西アジアや内陸アジアが、単にユーラシアの地理的な中心であるばかりか、文化的座標の中軸に位置することを提起」という目的から一部変更せざるをえないものの、基本的にはその延長線上にある。

また方法・手段に関しても、②に記した方向を継承していく。その上で以下のような点を意図していく。第一には、文字資料以外の資料、具体的には画像資料の収集と整理、第二には、中越地震で被災した文化財、とりわけ文字資料の積極的な保護と紹介、そして第三には学外の同様なプロジェクト、具体的には愛媛大学の資料学研究会（同大特別研究推進プロジェクト）との交流さらには共同研究である。

以上の目標を達成するために、引き続き『資料学研究』の刊行、研究資料叢刊の編集、ホームページでのデータベースの公開、研究例会の定例化、そして公開シンポジウムの開催などを企画・実施していく。

(5) 研究発表実績

- ア 学会誌等 計29篇
- イ 口頭発表 計39回
- ウ 出版物 計7冊（共著・共編を除く）

ウ 出版物（大域プロジェクト研究資料叢刊）

矢田俊文・相沢 央（編）『新撰越後国年代記』，新潟大学超域研究機構・大域プロジェクト研究資料叢刊Ⅳ，2005年2月。

矢田俊文・福原圭一・片桐昭彦（編）『上杉家分限帳－越後・会津・米沢－』，新潟大学超域研究機構・大域プロジェクト研究資料叢刊Ⅴ，2005年3月。

關尾史郎・岩本篤志（編）『トゥルファン出土「五胡」時代漢文文書俗字データベース』，新潟大学超域研究機構・大域プロジェクト研究資料叢刊Ⅵ，2005年3月。

關尾史郎（編）『中国西北地域出土鎮墓文集成（稿）』，新潟大学超域研究機構・大域プロジェクト研究資料叢刊Ⅶ，2005年3月。

關尾史郎（編）『『俄藏敦煌文獻』収載文獻一覽（稿）－Ⅲ（Дx00601～Дx03600）』，新潟大学超域研究機構・大域プロジェクト研究資料叢刊Ⅷ，2006年3月。

(6) 研究成果による知的財産権の出願・取得状況

なし。

(7) 新聞等のメディアに掲載された事項

本プロジェクトとしてはなし。個人としては分担者の矢田が中越地震からの文化財救出で、同じく白石がモンゴルにおける遺跡調査の成果でマスメディアの取材を受け、出演した。代表者の關尾はシルクロード関係の番組に資料提供を行ったほか、中国・西安で発見された遣唐使留学生の墓誌について取材を受けた。